
魔法少女リリカルなのは ～白き光の魔導士～

ざわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは　　白き光の魔導士

【Nコード】

N5183M

【作者名】

ざわ

【あらすじ】

彼の幸せはあの一瞬で奪われた・・・

彼は襲撃の真実と犯人を見つけるため魔導士となった。そして新暦75年。

物語は動き出す！！

プロローグ（前書き）

はじめまして。ざわです。
初小説なので間違えは
いろいろあると思いますが
よろしく願います。

プロローグ

俺は14年前のあの日、大切な両親を失った。

14年前

第97管理外世界（地球）

極東地区日本・海鳴市

「大地へ早くしなさい

なのはちゃんにお別れ言えなくなるわよー！！」

「はい」

俺はその日、海鳴市から

ミッドチルダに引越そうとしていた。

地球では魔法なんてなかったが、父さんが地球出身なのに魔力を持つていたので管理局の民間協力者として、事件などを解決したりしていた。

そして正式に管理局員に

なるためにミッドに引越すことになった。

でもそれを1番嫌がったのが、隣の喫茶店、“翠屋”の末っ子で俺の一つ下の幼馴染のなのはだった。

ちなみになのは達は、魔法のことなんて知らない一般人なので海外に引越すと言っている。引越しのことを、伝えた時はなのはが泣き出してなだめるのがたいへんだった。

俺が翠屋に行くと入って早々、なのはに抱き着かれた。

その時、恭也兄さんから

殺気がでていたのは

気のせいだったと今でも

思いたい……

「また、会えるよね？」

なのはは涙声になりながら、俺に聞いてきた。

「うん、会えるさ」

「約束だよ？」

「約束だ」

そうして、俺はなのはと
約束し、ミッドへ旅だった。
そして、俺は……

新暦75年

第1世界ミッドチルダ

機動六課正面

ある男が機動六課の建物を見上げて驚きの声を上げていた。

「はっ立派な建物だな」

「こりゃ。」

《マスター 関心してる場合ではありませんよ。》

彼の首にかかっている紺色の丸い宝石のようなデバイスがそう注意した。

「まあ、そう言うなってお前、ホントお固いな。」

《マスターがお気楽すぎるんですよ！！》

「だいたい、固すぎると

“あいつ”や“妹”に会った時に身が持たないだろ？」

《はあ、わかりましたよ。とにかく行きましょう。》

「ああ」

こうして彼の物語が動き始めた。

プロローグ（後書き）

次話はオリキャラ設定です。

オリ主設定 (Strikers) (前書き)

今回は、この小説に出てくるオリキャラとデバイスの設定です。

オリ主設定 (Strikers)

明日原 大地 (大地・A・ハラオウン)

出身：第97管理外世界 (地球) 極東地区日本・海鳴市

所属：遺失物管理部機動六課「スターズ分隊」

役職 / 階級：

機動六課「スターズ分隊」補佐 / 三等空佐

魔法術式 / 魔導士ランク：

ミッド式、古代ベルカ式 / 空戦SS+ (リミッター時 A)

魔力光：白

魔力変換資質：「光」

好きな物：甘い物、料理、掃除

苦手な物：苦い物、カビ、ダニ (というか汚い物)

容姿

CLANNADの主人公の岡崎朋也の髪を少し短くし、目と髪を黒くした感じ。左頬に傷がある。

性格

普段は呑気でだれにでも優しい。

しかし、任務になると性格が一変し、冷静となる。

バリアジャケット

上はYシャツで下は長ズボン。Yシャツの上にコートを着ている。

全体を白で統一している。

細かい所はなのはのバリアジャケットに似ている。

なのはの1つ上の幼馴染でフェイトの義兄。魔法の存在は父親が魔導士だったため、昔から知っていた。

地球からミッドチルダに引越す途中、謎の魔導士に襲撃され両親を亡くした。それからは、ミッドチルダにある孤児院で10歳まで過ごした。

そして、10歳の時にリンディ・ハラウンに引き取られた。

引き取られた後、なのはが魔導士になっていることを知り、リンディに自分のことをなのは達に黙っているようにお願いしていたため、なのはは大地がミッドにいることは知らなかった。

機動六課に出向してきた理由は、リンディに推薦されたのと謎の魔導士について情報を得るため。

六課では、なのはが率いる「スターズ」の補佐をしていてなのは教導の手伝いを時々している。

しかし、いつもはもっぱら事務仕事をしている。

食べ物に関しては極度の甘い物好きで、あのリンディ茶を平然と飲む。

料理や掃除が好きなど家庭的な一面もある。（料理はプロ以上らしい……）

戦闘はなのはに似て砲撃や射撃を得意とする。

しかし、接近戦にも強くシグナムを圧倒するほど

得意技はディバインバスター。

デバイス

ヴェリアル・ハート

大地のデバイス。

レイジング・ハートと同型。ただしレイジング・ハートよりも強度が高い。

AIは女。レイジング・ハートみたいに無理をすることはほとんどない。

フレンドリーで高性能なデバイスなので、大地から離れいろんな人と話してることがある。そのせいか大地より知られている。待機時は紺色の丸い宝石で、なのはレイジング・ハートみたいにネックレスになる。

アクセルモード

バスターモード

この2つは基本的にレイジング・ハートのほとんど変わらない。

セイバーモード

2つある接近戦用のモードの内の1つでスピードを重視している。双剣にもできる。

ナックルモード

もう1つの接近戦用で、大地のフルドライブ。攻撃に特化している。この時は、我流のシャイニングアーツを使う。バリア系やフィールド系などはこのモードには、ほとんど意味がない。

ブラスティングモード

大地のリミットブレイク

このモードも基本的な所は、なのはのエクシードモードと変わらないが、こっちはブラスターシステムみたいなリミットが5つ付いており、大地はリミット3までなら使えるが、リミット4と5は使った後の反動が強すぎるので封印してある。

オリ主設定 (Strikers) (後書き)

まだ、小説を書き始めたばかりなので設定考えるのがたいへんでした。

再会（前書き）

すいません。

投稿が遅れました。

今回は原作＋オリジナル話です。

再会

30分ほど前

機動六課部隊長オフィス

漸くできた機動六課の隊舎。

その隊舎の中にある部隊長オフィスでは、茶色のショートカットの女性、八神はやたと彼女のユニゾンデバイスであるリインフォース（ツバアイ）が話していた。

「このお部屋もやっと隊長室らしくなっただすね。」

「ふふ、そやね。リインのデスクもちょうどええのが見つかったよ。かつな。」

リインの身長は約30?。

普通の人よりも小さい、とか言うレベルではない。実際、よくリインにあうデスクがあつたものである。

「えへへ。リインにピッタリサイズです。」

リインは両手を上げてとても嬉しそうだった。その時、びびりとブザーがなった。

「はい。どうぞ。」

『失礼します。』

はやてはそう促して入ってきたのは、

「あ！ お着替え終了やな。」

「お二人共素敵です。」

栗毛色の髪を左側にサイドポニーにした女性、高町なのはと金色の長い髪を腰の辺りで黒いリボンで結んだ女性、フェイト・T・ハラオウンだった。

「にははは。」

「ありがとう。リイン。」

二人共、リインが褒めたことで、それぞれの反応をとっていた。

「三人でおんなじ制服姿は、中学校の時以来やね。なんや、懐かしい。」

「まあ、なのはちゃんは飛んだり跳ねたりしやすい、教導隊制服でいる時間のほうが多くなるやろうけど・・・。」

「まあ、事務仕事とか公式の場ではこっちってことで。」

微笑むはやととリインだった。

「さて、それでは。」

「うん。」

そこでなのはとフェイトは改めて、姿勢を正し敬礼した。

「本日、只今より、高町なのは一等空尉。」

「フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官。」

「両名共、機動六課に出向となります。」

「どうぞ、よろしくお願いします。」

「はい。よろしくお願いします。」

それが終わると三人共、笑い出す。

「そういえば・・・」

はやてが何かを言おうとした時、再びブザーがなった。

「どうぞ。」

入ってきたのは、薄紫色の髪に眼鏡かけて機動六課の制服を着た青年だった。

「失礼します・・・あっ」

その青年はなのはとフェイトがいるのに気が付いた。

「高町一等空尉、テストロッサ・ハラオウン執務官、ご無沙汰しています。」

そう言われた、なのはとフェイトは青年が誰なのか一瞬分からなかった。

「え〜と……」

「もしかして、グリフィス君？」

「はい。グリフィス・ロウランです。」

「わあ、久しぶり〜っていうか、すごい、すごい成長してる〜。」

「うん。前見た時はこんなちっちゃかったのに。」

なのはとフェイトはグリフィスの成長の速さに驚いていた。

「そ、その説は、いろいろお世話になりました。」

「グリフィスもここの部隊員なの？」

「はい。」

「私の副官で、後退部隊の責任者や。」

「運営関係もいろいろと手伝ってくれてるですう。」

グリフィスが来てからなのは達とグリフィスのやり取りを見ていたはやてとリインが、説明した。

「お母さん、レティ提督はお元気？」

「はい。おかげさまで・・・あっ！ 報告をしてもよろしいでしょうか。」

グリフィスは言おうとして忘れていた報告のことを告げる。

「どうぞ。」

「FW四名をはじめ、機動六課部隊員とスタッフ、全員揃いました。今は、ロビーに集合、待機させています。」

「そうかあ。けっこう早かったなあ。ほんならなのはちゃん、フェイトちゃん。まずは部隊のみんなにご挨拶や。」

『うん』

その頃、大地は……………

「ここ、どこだ？」

《なんで、内部の道のりを把握してないんですか！！》

「いや、大丈夫かなあと思って……………」

《どれだけ準備してないんですか！！》

「人に聞こうと思ってても人いないしなあ……………」

おもいつきり、道に迷っていた。

機動六課隊舎ロビー

ここでは機動六課の部隊長、八神はやての挨拶がちょうど行われようとしていた。

「機動六課、課長。そしてこの本部隊舎の総部隊長、八神はやてです。」

そこで隊員やスタッフ達から拍手がおこる。

「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として事件に立ち向かい、人々を守って行くことが私達の使命であり、なすべきことです・・・」

と、このような話が続き、隊長陣も紹介されていき、最後ははやての言葉で締めくくられた。

解散になった後、なのははFWの四人を集めた。

「これから行く所があるからついて来て。」

なのはがFW四人を連れて訓練場に行こうとしたところ、

「あつ、なのはちゃん。ちょっと待ってくれへん？
話とかないかんことがあるから。」

はやてに呼び止められた。

「話って？」

「実は、なのはちゃんが隊長をする『スターズ』には、補佐の人が
おるんよ。」

「えっ!？」

なのはは驚いた。

それもそのはずだ。

そんな話は、全く聞いてないからだ。

「でも、さっきの挨拶には、その人いなかったよね？」

「それが遅れとるみたいで……」

はやては、困ったように言った。

「ところでどんな人なの？」

なのはは気になったので聞いてみた。

「前はリンディさんの補佐をしてたらしいんや。」

「母さん・・・リンディ提督の？」

はやての言葉に近くにいたフェイトが反応した。

「それで優秀だからってリンディさんが機動六課に推薦してきたんや。あつ・・・それとなのはちゃんのことよく知ってるからって言つとつたなあ・・・」

「私をよく知ってる人？」

なのはをよく知ってる人はフェイトやはやて達以外はほとんどいない。

「（そんな人、いたかな？）」

そう考えていると

ロビーに背の高い男性が入ってきた。

「あちゃー。間に合わなかったか。」

《マスターがちゃんとしないからですよ・・・》

入ってきてからの言葉がこれだった。

そこにいた隊長陣とFW陣は啞然としていた。
ただなのはだけが混乱していた。

「大地・・・君？」

ロビーに入ってきたのが、14年前に海鳴市から海外に引っ越したはずの幼馴染、明日原 大地だったからだ。

「よ、久しぶりだな。なのは。」

なのはSide

私は一瞬、目を疑った。

そこに14年間、何の連絡も無く、もう会えないのかと思って
いた幼馴染がいたから

「よ、久しぶりだな。なのは。」

昔より伸びた身長。

少し低くなった声。

でも変わっていない性格と口調と雰囲気。

私は大地君になんて声をかけていいのか分からなかった。
すると大地君が私に近づいてきてこう言った。

「あの時の約束、ちゃんと守ったぞ。」

その言葉を聞いて私の目からは、関を切ったように涙が溢れだした。

大地Side

俺の言葉を聞いた後、なのはは急に泣き出しおまけに抱き着いてきた。
た。

「ちょ、なのは。これはマズイって!!」

「うえええええん!!」

本人は泣いて全く聞いてないし、近くに男性局員やスタッフ達からは、それだけで人が殺せるのでは?と思うくらいの殺気がでていた。しかも胸板になのはの胸がおもいつきり押し付けられていて、今にも理性が崩壊しそうだった。

フェイトはオロオロしてるし、八神は目が不気味に光ってるし、新人達なんてポカーンとしていた。

「とにかく落ち着け!!なのは。」

俺はなのはを一旦引き離し落ち着かせた。

「ぐす……うん……」

「とにかく!部隊長。」

「は、はい?」

「後の話は部隊長室でやりましょう。」

「わかった。」

「ところで新人達はどうするんですか?」

「そやな……此処で待機してもらつとこうか。」

新人達にそのことを伝え、俺となのは達、隊長陣は部隊長室に向かった。

「ところでなんで遅れたん？」

「道に迷いました・・・」

『・・・』

再会（後書き）

まだ慣れてないので疲れました。

自己紹介（前書き）

今回はオリジナル話です。

最近、小説に集中したいのに学校のことであって集中できません。

ああ〜小説に集中したい！！

自己紹介

機動六課

隊長長室

部隊長室にはなのは達、隊長陣と大地のほかにメカニクデザイナーのシャーリーが来ていた。ちなみにシャマルとザーフィラは用事があるとのことで来てなかった。

「じゃあ早速、自己紹介して貰おか。」

「わかりました。俺の名前は、明日原 大地です。階級は三等空佐。

前はリンディ総務統括官の補佐をやっていて、主に事務関係を任されていました。

魔法術式はミッド式と古代ベルカ式の二つ。

魔導士ランクは………Aランクです。」

「なんやの今の間は!?!」

はやてはおもわずツツコミをいれてしまった。

「ナ、ナンデモナイデスヨ」

「わかりやす!?!」

大地はおもいつきり片言になってしまっていた。

「とにかく隠してないで話してよ。」

なのはが大地に言う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言の大地。

「ダメ？」

そんな大地になのはは上目使いでお願いした。

「わかりました・・・」

大地、敢え無く撃沈。

仕方なく本当のことを言った。

「本当はSS+です。」

「ええええええええええ！！」

そこにいた全員が驚いた。
シグナムはこれを聞くと

「よし、明日原、今から模擬戦をやろう。」

さっそく、バトルマニアの血が騒ぎ始めていた。

「絶対、いやです！！」

大地はこの申し入れを即座に却下した。

「何故だ!!」

「いやと言ったら、いやなんです!!」

「だいたい、こういうことになるから言うのいやだったんですよ!!」

大地は、はやて達におもいつきり愚痴った。

「ははは、すまんかったなあ。」

「謝る暇があつたらなんとかして、シグナム二等空尉を説得してくださいよ!!」

その後、はやてが説得するとシグナムはすぐにおさまった。

「はあ、疲れた・・・」

「す、すまなかった。」

シグナムははやてに説得された後、反省していた。

「もう、いいですよ。」

その時、なのはは気になったことがあったので、大地に質問した。

「ねえ、大地君。」

「なんだ？　なのは。」

「大地君は、古代ベルカ式も使えるんだよね？」

「そうだけど、それがどうかしたか？」

「古代ベルカ式が使えるってことは大地君の戦い方って、シグナムさんやヴィータちゃんと同じなの？」

「確かに接近戦もできるが俺の基本的な戦い方はなのと同じ射撃や砲撃だ。」

「そうなんだ。」

「だいたい、デバイスが似ているから当たり前だろ。」

そう言つて、ポケットから取り出されたのはなのはのデバイス、レイジング・ハートと外見がほとんど一緒のデバイスだった。唯一、違うのはレイジング・ハートとは対照的な色のコアだけだった。そこにいただれもが一瞬、レイジング・ハートと見間違えた。

「こいつは俺のデバイス、ヴェリアル・ハート。」

所々、違う所もあるが基本的な所はほとんどレイジング・ハートと一緒にだ。

あつ、ただし性格は違うからな。

俺に文句言う所とか。」

《皆さん、よろしくお願いします。

つていうか、マスター、途中までよかったのに、最後の説明がおかしかったですよ。

私は文句なんかいしません。》

「いや、すでに言ってるじゃん。」

《言ってません!!》

「言ってる。」

《言ってません!!》

こんなやり取りが5分間続き、最後ははやてに両方共怒られ、やり取りは終了した。

「まあ、とにかくこれからよろしくお願いします。」

「はい。よろしく。」

ところで、大地君。」

「なんですか？八神部隊長。」

「その堅苦しい喋り方、やめてくれへん？なのはちゃんに喋る時みたいでいいから。」

「マジで！？よかつた」

この喋り方してると疲れるんだよな。」

周りは、大地の変わりように啞然としていた。

「あつ!! そうそう忘れてた。」

そう言いながら大地は持っていた紙袋をはやてに渡した。

「これは？」

「爆弾。」

『ええええ！！！！』

「嘘。」

「嘘かい！！」

大地がボケて、はやてがツツこむ。

この何十分かで大地とはやては息ピッタリだった。

この時、なのはからどす黒いオーラが出始めた。

「大地君。結局、その紙袋の中はなんなの？」

なのはの声を聞いたのはやての顔は青ざめていた。

周りのフェイト達も巻き込まないように離れていた。

「何、怒ってんだよ。」

せつかくの綺麗な顔が台なしだぞ？」

「き、綺麗！？」

その言葉を聞いたなのはの顔は一瞬で熟れたトマトみたいに真っ赤になった。

「後、この紙袋の中に入ってるのは、俺特製のクッキーだ。」

「え、クッキー？」

大地、お菓子作れるの？」

フェイトが大地に聞いた。

「お菓子もだけど料理ならなんでもできるぞ？」

「大地君の料理、すごく美味しいんだよ!!」

いつの間にか復活したなのはが言った。

その言葉にはやての中で大地への対抗心が燃え上がった。

「そういうことなら、今度大地君と私で料理対決しいひんか？」

「いいぜ。」

受けて立ってやる。」

ということで大抵とはやての料理対決が決まった。

「はやて。」

「なんや、ヴィータ。」

「話がズレてきてない？」

「あっ……」

ヴィータの指摘通り、最初の自己紹介から料理対決へとズレていた。

「と、とにかくこれからよろしくな。大地君。」

「ああ、よろしく。」

これで大地の自己紹介は終わった。

「そういえば、なのは。」

「何？」

「新人達、待たせてるけどいいのか？」

なのはは待たせている新人達のことをすっかり忘れていた。

「あ、いけない！！」

大地君も補佐なんだからついて来て！！」

「わかった。」

なのはと大地は部隊長室を出ていった。

その後、

はやてが「勝てへん。」と呻きながら部隊長室で突っ伏していたの

は、
また別の話。

自己紹介（後書き）

前書きでなんか変なこと書いてしまったてすいません。

初訓練（前書き）

投稿遅れました。 すいません m () m

今回は三話の初訓練の話です。

初訓練

なのはと大地はFWの四人に急いで合流した。はやてとフェイトは機動六課の立ち上げ理由の一つになったレリックの説明のため本局に行っていて別行動だった。

「ごめんね、ずいぶん待たせちゃったみたいで」

なのはは待たせたことを謝った。

「い、いえとんでもない、大丈夫です……ところでそちらの方は？」

ティアナはなのはの後ろにいた大地に気づいた。

「あつ、さっきいなかったしわかんないよね。」

この人は機動六課で私の部隊、スターズの補佐をしてくれる……」

「明日原大地三等空佐だ。よろしく、四人共」

大地はなのはの言葉を途中で引き取り、簡単な自己紹介をした。

「スバル・ナカジマ二等陸士です」

「ティアナ・ランスター二等陸士です」

「エリオ・モンディアル三等陸士です」

「キ、キャロ・ル・ルシエ三等陸士です」

四人も大地に挨拶した。

「おいおい。そんなに固くならなくていいって。呼び方も自分達で好きにしていぞ。」

大地はガチガチの四人にそう言った。それを聞いて四人の固さは抜けた。

「そういえば、お互いの自己紹介はもう済んだ？」

なのはが振り向き、四人に聞いた。

「え、えつと・・・」

「名前と経験やスキルの確認はしました。」

「後、部隊分けとコールサインもです。」

スバルは急な質問にすぐには答えられず、ティアナとエリオが冷静に答えた。

「そつ、じゃあ訓練に入りたいんだけどいいかな？」

なのはは四人に聞いた。

『はい！！』

四人からは元気な返事が返ってきた。ただし、一人は

「（はあゝ今からかよ……）」

内心でめっちゃ嫌がっていた。

訓練場

なのはと大地はスバル達を待っていた。

「なあ、なのは。」

大地は気になったことがあった。

「何？」

「訓練場はどこだ？」

大地達目の前にあるのは、海の上にある巨大な鉄のプレートだけだった。

「あれだよ。」

なのはが指差したのは目の前にある巨大な鉄のプレートだった。

「いや、あれただの鉄のプレートじゃないか？」

「見ておけばわかるよ。」

そんなこと言われたので大地は黙ってみていることにした。

「なのはさくん、大地さくん」

「シャーリー」

さつき部隊長室で別れた、シャーリーがこちらへ走ってきた。
少しすると反対側から四人もきた。

シャーリーはなのはが説明する前に事前に預かっていたデバイスを
四人に返した。

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入ってるから
ちよつとだけ大切に扱ってね。」

それとメカニックのシャーリーから一言」

「えーメカニックデサイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フイ
ニーノー等陸士です。」

みんなはシャーリーって呼ぶのでよかつたらそう呼んでね。

みんなのデバイスを改良したり、調整したりするのでときどき訓練
を見せてもらったりします。

あつ、デバイスについての相談とかあつたら遠慮なく言つてね」

『はい！！』

シャーリーの紹介が終わると、

「じゃあ、さっそく訓練に入ろうか？」

なのはがそう言った。

「は、はい」

「でも、ここですか？」

スバルとティアナは疑問に思っていた。

「ふふ、シャーリー」

「はい」

そう言うときシャーリーは端末を展開して何かの用意を始めた。

「機動六課自慢の訓練スペース。

なのはさん完全監修の陸戦用空間シュミレーター。

ステージセット」

すると目の前の巨大な鉄のプレートから町が浮かび上がってきた。

「わあ」

「あああ」

「ああ」

「すごい・・・」

四人はそれぞれ、目の前の光景に驚いていた。

「へえ、これ、なのはが監修したのか。
すごいな・・・」

大地も大地でこの技術に関心していた。

【よしつと、みんな聞こえる？】

『はい！！』

なのはと大地とシャーリーはビルの上から四人を見ていた。

「じゃあ、さっそくターゲットを出していこうか。
まずは軽く八体から」

「動作レベルC、攻撃制度Dってどこですかね」

そう言って端末を操作した。

「うん」

【私達の仕事は搜索指定ロストログアの保守管理。

その目的のために私達が戦うことになる相手はこれ!!】

すると四人の目の前に魔法陣が現れ、そこから八体の縦長いロボットが現れた。

「ガジェットか・・・」

大地が呟いた。

【そうです。自立行動型の魔導機械。

これは近づくと攻撃してくるタイプね。

攻撃はけっこう鋭いよ〜】

【では、第一回模擬戦訓練、ミッション目的逃走するターゲット八体を破壊または捕獲、15分以内】

『はい!!』

『それでは・・・』

『ミッション・・・』

【スタート!!】

こうして四人の初めての訓練が始まった。

「なにこれ！！ 動きはやつ！！」

「ダメだ。ふわふわ避けられて当たらない・・・」

新人四人は魔導機械に苦戦を強いられていた。

「苦戦してるな・・・」

ビルの上からみていた大地が言った。

「そうだね。あつ、そうだ！！」

なのはが何かを思い付いた。

「大地君の実力を見てみたいから、後で戦ってみて」

「はあ！？」

大地は思ってもみなかったことを言われ驚いた。

「どうしてもやらなきゃいけないのか？」

大地はなのはに聞いた。

「うん」

「拒否権は？」

「ないよ？」

「はぁ・・・わかったよ」

結局、やることになった。

丁度同じ頃、ティアナが撃った魔力弾がガジェットに当たる前に消されていた。

「バリア！？」

「違います。フィールド系！！」

「魔力が消された！？」

四人は魔力が消されたことに驚いていた。

【そう、ガジェット・ドローンにはちょっと厄介な性質があるの。攻撃魔力を掻き消す・・・】

【アンチマギングフィールド。
通称AMFだ】

なのはの言葉を遮り、大地が続きを言った。

【大地君！！ それ私が言うこと！！！！】

大地が自分が言うことを言ったのでなのはが頬を膨らましながら怒った。

しかし大地は

「（全く、可愛い奴だ）」

としか思っ てなかった。

【まあ、いいじゃん。

とにかく説明してやれよ。】

大地はなのはに言った。

【全くもう！！ ごめんね。説明途中に。

ちなみに普通の射撃は通用しないし……】

「あつ！！ くそう！ このお！！！！」

なのはが言ってる途中でスバルがビルの上に逃げたガジェットを追うために、ビルの上までウイングロードをひいた。

「スバル！！ 馬鹿、危ない！！」

そんな言葉を見殺してスバルは進んで行く。

「それに、AMFを全開にされると……」

シャーリーがガジェットのAMFを全開させるとスバルのウイングロードが不安定になって

「きゃああああ!!」

スバルはウイングロードから落ち、ビルに突っ込んだ。

【気象や足場作り、移動系魔法の発動も困難になる】

「まず説明する前にスバルの心配してやれよ……」

冷静に説明しているなのはに大地がツツコンだ。

【スバル、大丈夫か?】

「いつう…な、なんとか…」

【まあ、訓練場ではみんなのデバイスにちょっと工夫をして擬似的に再現してるだけなんだけどね。

でも、現物からデータをとってるし、かなり本物に近いよ】

【対抗する方法は幾つかあるよ。

どうすればいいか素早く考えて、素早く動いて!】

なのはは四人にそうアドバイスした。

そのあと、ティアナを中心にガジェットに反撃し始めた。

「へえゝみんなよく走りますねゝ」

「危なつかしくてドキドキだけどね」

「最初はそんなもんだろ 誰だって」

なのは達はそんなことを話していた。

「デバイスのデータは採れそう？」

なのはがシャーリーに聞いた。

「いいのが採れそうですよ」。

四機共良い子に仕上げますよ」。

レイジング・ハートさんも協力お願いしますね」

《了解しました》

その頃、新人四人は作戦を立て、ガジェットを倒そうとしていた。
エリオは前方から向かってくるガジェットを止めるため、

「いくよ、ストラダ。カートリッジロード!!」

ストラダのカートリッジを一発ロードさせて、足元にある橋を破壊した。

その橋の瓦礫を避けて、ガジェットが上空に上がった所を今度はスバルが魔力を込めた拳で殴り付けた。

しかしAMFで魔力が消されて、いつもの威力は出てなかった。
「イマイチ威力が出ないなあ〜それなら……」

スバルは後ろに行たガジェットにまたがり、

「うりやああああ!!!」

リボルバーナックルをガジェットにのめり込ませて破壊した。

「よし!!」

「連続行きます。フリード、ブラストフレア………ファイア!!!」

そう言うつとフリードから炎が放たれ、ガジェットの近くに着弾してガジェット達がショートして動きが止まった。
それを見て、キャラも永唱を唱え始めた。

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。
言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖……錬鉄召喚、アルケミックチエーン!!!」

すると魔法陣から三本の鎖が現れて、三体のガジェットを捕らえた。
シャーリーはこれを見て関心していた。

「へ〜召喚つてあんなこともできるんですね」

大地も声には出してないが

「（無機物の召喚か。俺は初めて見たな）」

内心では驚いていた。

「こつちだつて射撃型。

無効化されてはいそうですか？下がつてたんじゃ生き残れないのよ！！」

【スバル、あたしが上から仕留めるからそのまま追つてて！！】

【おう！！】

ティアナはスバルにそう指示を出し、自分は魔力弾を膜状バリアにくるみ始めた。

これを見ていたシャーリーは驚いた。

「魔力弾！？AMFがあるのに？」

《いいえ、通用する方法があります》

レイジング・ハートがシャーリーの感想に答えた。

「うん……フィールド系の防御を突き抜ける多重弾殻射撃。AAランクのスキルなんだけだね……」

「ああ……」

「AAランク！？」

シャーリーはまたもや驚いていた。

「固まれ．．．固まれ．．．」

ティアナは外殻を固めるのを全神経を使って必死にやっていた。

「うおおおお！！！」

漸く外殻が固まったようでティアナは引き金を引いた。

「ヴァリアブルシュート！！！」

オレンジ色の魔力弾がガジェットをAMFごと貫いて残っていたガジェットを全機、破壊した。

ティアナは疲れて倒れ込んでいた。

【ティア、ナイスだよ！やったね、流石！！】

「スバル．．．うっさい．．．このくらい．．．当然よ．．．」

この後、15分間の休憩が取られた。

その休憩の間に大地がやることになった。

【大地君、準備はいい？】

「いや、待て。ヴェリアル・ハート セットアップ」

《Stand by ready Set up》

大地がセットアップすると大地がまばゆい光に包まれた。

光が収まるとそこにいたのは、全身を白で統一したバリアジャケットを着ている大地だった。

「き、綺麗……」

キャロがおもわず呟いた。

「じゃあ、準備ができたみたいだから始めるよ。

シャーリー、数は30体動作レベルS、攻撃制度Aでお願い。

みんな、明日原三佐の動きをしっかりと見ておくんだよ」

『はい!!』

なのははスバル達にそう言った。

しかし、その会話を聞いていた大地が言った。

【いや。別に俺、動かないけど?】

【えっ!? どういうこと?】

なのはは理由を聞こうとしたがすでにその時には始まっていた。

「ヴェリアル。ターゲットは何メートル範囲にいる？」

《えっと、全機、400メートル範囲にいます。》

「わかった。ヴェリアル、アクセルモード！」

《アクセルモード》

そう言うのとヴェリアル・ハートの形が変わった。

「さてと、やりますか。

アクセルレイン・・・」

《アクセルレイン》

すると大地の遥か頭上に数百発の魔力弾が現れた。

「ダウン・・・」

大地がそう言うのと魔力弾の雨が大地の周りに降り注いだ。白い砲撃として目の前の建物を次々と飲み込んでいった。魔力弾の雨が止むとそこに広がっていたのは大地の周りを取り囲むように広がったビルの瓦礫とガジェットの残骸が転がった土地だった。

「なんですか……あれ……」

そこで大地の様子を見ていたティアナが呟いた。
なのは達も大地の攻撃を見て目を疑った。
本当にリミッターがついているのかと……

大地達の様子を訓練スペースから離れた所から見ていたシグナムと
ヴィータはそれぞれの反応を取っていた。
ヴィータはリミッター付きにも関わらずあれだけの威力の技を出せることに戦慄を覚えていた。
一方、シグナムはと言うと……

「（やはり、戦ってみたい!!）」

再び、バトルマニアの血が疼きはじめていた。

初訓練（後書き）

夏休みが全くないっす（∴
―∴
）

炎と光と嫉妬（前書き）

初訓練の一部の文が二度繰り返し返されていたのは修正しておきます。
とにかくおはすかしい限りです。

今回は、戦闘シーンとなのは嫉妬、再びです。

戦闘シーンは苦手です。すごく短いです。

炎と光と嫉妬

大地はあの後、隊舎に戻ろうとした時に再びシグナムに試合を申し込まれどうしてもやりたいというシグナムの願いに負けてはやてに許可を取り、シグナムと試合をすることになった。

「はあゝ」

大地はさっきからため息ばかりついていた。

《マスター。ため息ばかりついたら、幸せが逃げちゃいますよ》

「逃げやしねえよ。大体、幸せを味わえるのは甘いものを食べる時だ！！」

大地は甘いものに関して力説し始めた。

《・・・・・・・・》

しかし、長い間彼のデバイスとして彼を見てきたヴェリアル・ハートは幸せと聞いたときに彼の瞳に一瞬映った悲しみの色を見のがさなかった。

【大地君、そろそろ始めていいかな？】

上で審判をしているのはから念話が入ってきた。

「ああ、ゴメンゴメン。始めていいぞ」

「それじゃあ……スタート!!」

なのはの合図で大地とシグナムの模擬戦が始まった。

最初に攻撃を仕掛けたのはシグナムだった。
愛剣のレヴァンティンを抜き、大地に切り掛かった。

「はああああ!!」

「うおっと!!」

大地はそれを屈んで避けて、

「ヴェリアル、セイバーモードだ」

《セイバーモード》

射撃主体のアクセルモードから接近主体のセイバーモードに変えて
シグナムの次の一撃に備えた。

「ほお、それが明日原の接近戦のモードか」

「そうだな。あなたがいくら接近主体と言ってもやる以上は負ける
気はさらさらない」

「望むところだ!!」

両者は真正面からぶつかり合った。

「はぁ!!」

「くっ」

だがシグナムが大地に押されていた。

その戦いの様子をなのは達は遠くから見ていた。

「おいおい、シグナムが押されてるじゃんか。

あいつ、なのはと同じタイプじゃないのかよ……」

ヴィータはシグナムと大地の模擬戦を見ながらそうもらした。

「これがシグナム副隊長と大地補佐の戦い……」

「すごい……」

スバル達は目の前で繰り広げられる戦いのレベルの高さに驚きながら見ていた。

大地に押されていたシグナムは状況を逆転させるためにカートリッジをロードさせると刀身が炎を纏った、大地もそれに合わせてカートリッジを一発ロードさせた。すると刀身がまばゆい光を放ちはじめた。

「なんだ？それは。お前の魔力変換資質なのか？」

シグナムは自分を圧倒するほどの大地の剣技の高さにも驚いていたがこれにはさらに驚いていた。

「ああ、俺だけが持っている魔力変換資質“光”。人に見せるのはシグナム達が初めてだ」

「それはうれしいな。だが負けん！！」

「勝つのは俺だ！！」

やり取りが終わると両者は一気に近づき

「紫電、一閃！！」

「光牙、一閃！！」

互いの技を放った。

なのは達は大地の剣が光出したことに驚いていた。

「なんだあれは!？」

「魔力の変換かな?でもあんな魔力変換資質なんて聞いたことないし……」

そうこうしている内に、シグナムと大地の技がぶつかり合った。一瞬、均衡したが大地の光牙一閃がシグナムの紫電一閃を掻き消し、シグナムに当たった。

シグナムは攻撃が当たり気絶して地面に落ちそうになったが大地がシグナムが落ちる前に受け止めた……。が、その受け止め方が問題だった。

膝の下に左手を廻し身体を右手で支える、世に言うお姫様抱っこの状態だった。シグナムには何とも似合わそうな体勢である。

大地からすればただシグナムを受け止めたらこんなふうになったのだろうがそれを見たのはからはまたもやどす黒いオーラがでていた。

周りにいた大地の力について大地に聞こうとしていたスバル達四人は顔を真っ青にしてなのはから離れた。

シグナムの体勢を見て笑っていたヴィータやシャーリーもなのはから離れて大地に合掌していた。

「大地君。お話ししようか？」

大地はシグナム医務室に運ぼうとしてなのはに声をかけられて振り返り、顔がスバル達同様、真っ青になった。

「い、一体何を怒っていらっしゃるのでしょうか？
せつかくの顔が台なしですよ？」

「そんなこと言っただって無駄だよ？さ、逝こうか？」

「字が違っからー！」

大地の口説きが効かず、大地はなのはに訓練場に引きずられて行った。

「ぎゃあああああー！！！！！！」

その後、訓練場から大地の叫び声が聞こえていた。

炎と光と嫉妬（後書き）

言い忘れてましたが遅くなつてすみません。
あと、設定は物語が進むとさらに増やします。

一万アクセス突破　作者の扱いは酷かった

ざわ「いやっほい！！！！一万アクセス超えた！！！！！！！！」

大地「うるさい！！」

ざわ「ぐべっ！？」

はやて「まあまあ、漸くこの駄目小説のアクセスが一万いったんやから」

ざわ「今、さらりと駄目小説、いいましたよね！？」

はやて「気にしたら負けやで！！」

ざわ「いや、気にしますって！！　ただでさえいろんな間違いやらかしてるんだから。

初訓練の時とかさ同じ文を編集ミスで・・・ブツブツ」

フェイト「はやて、あんまり攻めるとざわが鬱に・・・」

なのは「そうだよ。はやてちゃん。鬱になつて小説が余計に悪くなるよ」

ざわ「うええええええんもうやだ！！！！！！！！！！」

大地「おい、お前らのほうがひどいんじゃないか・・・大丈夫なのか？作者・・・」

二人『全然、大丈夫だよ（や）』

大地・フェイト『（頑張れ、作者。もつといい小説書けるようになつたらきつと二人の態度も変わるから……）』

スバル「なのはさ〜ん!!」

なのは「あつ、スバル達も来たんだ」

ティアナ「はい。というかさつき、泣きながら走って行く作者を見かけたんですけど、なにかあったんですか？」

はやて「いや、ちょっと弄っただけや。なあ、なのはちゃん、フェイトちゃん」

なのは「うん」

フェイト「そ、そうだね……」

ティアナ「そ、そうなんですか……」

シグナム「主はやて」

はやて「あ、シグナム達も呼ばれとつたんか」

ヴィータ「うん、あ、そういえば途中、作者が泣きながら走ってうるさかったからボコして連れてきた」

エリオ「うわ!？」

キャラ「だ、大丈夫ですか!？」

ざわ「だ、大丈夫だ。ありがとう。心配してくれるのエリオとキャラだけだよ……ガク」

フェイト「ざわ!？」

大地「……本当に大丈夫、なのか？」

二人「大丈夫、大丈夫」

大地・フェイト・エリオ・キャラ「(絶対、大丈夫じゃない……」

大地「大体二人共、作者に恨みでもあるのか？」

二人「ある」

エリオ「即答……」

大地「どんなのだ？」

はやて「だって出番少ないやんか!！」

大地「それならフェイトだって同じくらいだぞ……なのはは？」

なのは「はやてちゃんやシグナムさんとばかりいいかんじになって私はヒロインなのに……ブツブツ」

スバル「いろいろあるんですね……」

大地「まあ、いいや。とにかくこれからもこの小説を・・・

全員『よろしいお願いします!!!!』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5183m/>

魔法少女リリカルなのは ～白き光の魔導士～

2010年10月21日00時55分発行